

史である。我等は特に第七章「歴史小説と歴史」の戰國時代に歴史的小説が盛行を極め、左傳の如きもかゝる文學を含んで居るこいふ所説に注意を拂ふべきである。歴史的小説の語の代りに物語といふ語を用ひ、又先秦の諸子に支那特有の語録といふ文學の形式、更に換語すれば雄辯學の教科書に似た性質を認めるならば、氏の所説も受け入れてよいと思はれる。

最近ヒルトの古代史の邦譯が出版せられた。本書も亦その翻譯が日佛會館の手で企てられて居るに聞く。その實現完成の一日も早からん事を願ふ次第である。〔小川〕

●滿州舊蹟志(上下續三冊)滿鐵調查課發行

從來滿州の紹介法は實利的方面に没頭し精神的方面を閑却して居た爲に、既に漢代に支那本部から海陸兩路によつて漢人移住の歴史は頗る古く、一方遼金時代より元明時代に互り幾多の民族の興亡があり、其舊蹟は今尙各所に殘存して居るにかゝらず、唯古往今來茫漠たる廣野であるかの如く速斷されて居るので、滿鐵が大正十一年五六月庶務部調査課囑託八木契三郎氏に命じ沿線地方

の舊蹟名勝を調査せしめて、其報告として本書が公にされたのである、其上篇(五三七頁)は奉天以南の部分で十三年三月十二日に、奉天以北及び安奉線は合して下篇(五〇九頁)として十五年十二月五日に發行され、其後更に遼西の一部及び遼東地帶の缺漏してゐたものを視察して昭和四年三月二十日續滿州舊蹟志(一九六頁)として公にさるゝに至つた。

滿州に於ける古蹟名勝等の現況を記載して廣く世人の便益に供すべき良書は殆んど絶無な上に、其多少古蹟等にふるゝものは誠に杜撰で、甚しきに至つては地名の沿革を古蹟の部に加ふるものさへあり。又口碑傳説に關する地理的由緒をしきりに列舉するものがあるが、感興は別として學術上には裨益する所が少い。本書の特長は大體に於てこれらの類を除き一方學問上に利益あると同時に他方風景の賞すべき價值あるもの、或は美觀上の價值は別として土地の由緒を助くる類を撰定し、更に又世に所謂古蹟名勝の類のみに限らず、學術上古蹟と稱すべきもの、即ち古くは石器時代より順次に古蹟、古陶窯の類を

も含ましめ、古今の凡てを網羅した點にある。

上篇は第一編を先史時代とし、第二編を有史時代とし殊に城廓の變遷、儒教關係及び道教關係の神廟、佛教關係の寺廟について詳述され、下篇に於ては第一章に奉天以北の先史時代を、第二章に其有史時代を、第三章には安奉沿線の諸舊蹟を收めてある。續志の方は多少趣を異にしてゐる。滿州は遼河の東西によつて其歴史傳説に大きい相違があり、民族上より云へば遼西は東胡で遼東は扶餘派とも云ふべく、面白い對照をなして居る。八木氏は先づこれらの渤海灣の周圍に棲息した古代の民族竝に彼等と漢民族との文化交渉を闡明せんと言はれたが旅行不可能の爲に上に述べた如く昭和三年秋遼西の一部及び遼東の缺漏を視察して他の特種調査を省略して本書の發行をみるに至つたのである。それで先づ總論に於て、渤海岸の古民族と先史時代の關係、鮮卑族と慕容氏の興亡、佛教の東漸と民族關係等の題下に一般大勢論を述べた後第一章を遼東、第二章を遼西、第三章を關東州の記述にあてられてゐる。其中にも撫順立菟論、及び南蘇新城に

南北山城子論の如きは、皆實地上の觀察に基いたもので机上の空論とは異り注目すべきものと思ふ。下篇の終には古蹟分布略圖を付し各冊八木氏自ら筆寫の略圖、及び舊教育研究所の田中秀作氏が撮影した一部の寫真を入れ理解を助けてゐる。筆者も云はれる如く、概して興味本位ではなく多少堅苦しい觀もあるが、元來一時眼前の便のみを圖つたものでないから、寧ろ將來には却つて裨益する所があると思ふ。實利的統計的紹介と別に此書によつて滿州の紹介される事は意義深いものと思はねばならぬ（今石）

● 史學概論

野々村戒三著

事物を史的に考察することが近時あらゆる方面で重要視されるやうになつて來たが、世人の多くは未だ史學に關する明確なる知識を具へず動もすれば誤つた觀念を懷いてゐるものが少くないので本書は世人に史學とは如何なるものであるかといふ概要を知らしめやうとするもので、全編を原理論と方法學との二部に分ち、前者には史學の概念、歴史認識、歴史の分類、史觀の變遷、の四章